●春日部市民文化講座（第 45 回）　「茶の湯とキリシタンの関係とは」

◆**日時**：2024 年 11 月 6 日(水)　10 時 42 分（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■茶の湯とキリシタンの関係とは

私のきょうの講演は「茶の湯とキリシタンの関係とは」です。茶の湯とキリスト教は関係があるのか、無いのかと皆さんも思われるでしょうが、これについてはいろいろな方がさまざまなことを言われています。そのくらいに、長い茶の湯の歴史の中で謎とされてきたことなのです。でも、三千家はアンチキリスト教と言ってもいいでしょう。ただ、裏千家の前御家元の宗玄室宗匠は一時期ですが、キリスト教との関係を盛んにおっしゃっていました。その頃に、ぼくも直接お会いして話したことがあるのですが、今はもう違います。私の属している表千家は、熊倉功夫さんという学者先生もいますが、キリスト教と千利休および侘び茶の関係についての論文は出てきません。雑誌などに、茶の湯とキリスト教との繋がりが書かれている場合もありますが、実は証拠が無いので明確化できないのですね。でも、きょうは「茶の湯とキリスト教の関係」をぼくが明確化していきたいと思います。

◆伊勢侍従宛利休手紙

解説
小松茂美

菊月二十二日　伊勢侍従あて
一五二×八三・一㎝　大阪城天守閣蔵

折紙の手紙を、折りめに沿って切断し、長く継いで一幅の大横物に仕立てた手紙である。あて名の上に、切封の封じめの紙片がかかっていたために、二字めの文字を失っている。が、これは67の「松嶋さま」にあてた一通と同じく、蒲生氏郷にあてたものである。あて名は、残画をたどりながら判読すると、「伊勢侍従持殿」と見える。従持というのは、「侍従」を利休が転倒誤写したものである。氏郷は、当時、伊勢の松嶋城（のちの松坂城）の城主であった。天正十六年（一五八八）、従四位下・侍従に任叙せられ、羽柴の姓を許された。その後、天正十八年八月九日には、会津若松城に転封。すると、氏郷が伊勢侍従を称せられるのは、この二年間にしぼることができる。この手紙の年代推定の最初の鍵である。次の手掛かりは、文面の書き出しに見える「仍、南坊、昨日、午刻ニ宮古を立被申」とある箇所。この南坊というのは、高山右近（一五五二―一六一五）である。彼は、早くから利休に師事して、「利休七哲」の一人に挙げられ、「利休極上一の弟子也」（『茶道仰聞書』）と称せられた。右近が南坊を号した時期は、つまびらかではない。が、天正十二年ごろの茶会には、いずれも「高山右近」の名で登場している（『宗及自会記』『宗及他会記』）。ところが、『利休百会記』によれば、天正十八年十二月二十七日の朝、利休の茶に一人で招かれている。利休の記録によれば、彼の名を「高山南坊」と記している。翌十九年正月二十五日の朝会には、有馬中務少輔則頼（一五六三―一六〇三）とともに、この「高南坊」が参会している。その後、文禄二年（一五九三）正月二十六日の昼、この「南坊」は九州・名護屋の秀吉の陣に至り、神谷宗湛を招客として、茶会を催している（『宗湛日記』）。とすると、天正末年のころには、すでに南坊を号していたことが知られる。が、依然、その時期は確かでない。ところで、この文面による高山南坊が京を発足したというのは、いったい、何を意味するのであろうか。これより先、彼はキリシタンの洗礼を受けて、熱心な信徒であった。天正十五年六月、秀吉の伴天連追放令に連座して、彼もまた放逐された。小西行長が伊予の小豆島に隠まった。が、行長が肥後移封後に前田利家は、秀吉に懇請して、高山右近を加賀に引き取った。右近は、これを謝したが、「禄は軽くとも苦しからず、耶蘇宗の一カ寺建立下さらば参るべし」（『寛永南島変』）と条件を提示した、という。彼が、金沢に至った時期は明らかではない。海老沢有道氏によれば、「天正十六年の秋のことであったろう」（『人物叢書『高山右近』一五五ページ参照）といわれる。この手紙は、後述するように、先の80と密接な関係に結ばれるもので、その「菊月（九月）廿二日」は、先の80に遅れること、わずか四日である。そして、手紙の文面に見える高山右近の金沢下向は、天正十六年九月二十一日の正午。前記、海老沢氏の推定も誤らないのである。この時、右近は三十七歳。しかして、すでに南坊を号していたことを知るのである。この手紙は、また、高山右近の伝記史料の一ページを書き加えるべき貴重な一通でもあるのだ。さて、手紙の次の文面。「我等、大仏普請、一昨日、家の屋ねをふき申候。當月中ニ茶湯出可申覚悟候」というのは、80の手紙とかかわる。それには「数寄屋の事ハ、我等才覚可申候」と記されていたではないか。その数寄屋の建築が、この手紙にいう利休の「我等、大仏普請」である。一昨日、屋根を葺いたという。とすると、80の手紙の翌二十日には、屋根葺き工事を一日で終えていることを知る。しかも、利休は、この数寄屋を当月中に完成したい、という。といっても、残る日数は十日にも足りないのだ。利休は、さらに筆を続けて、「貴殿へ御屋しき、渡可申候間、其分御心得なされ、早ゝ御上洛」をと、落成の数寄屋を蒲生氏郷に引き渡すべく、上洛を促している。また、「御城、早出来と存承候。目出度令存候」というのは、氏郷の伊勢・松嶋城の構築工事の完成を祝しているのである。これは、67に述べたように、天正十六年の八月であった。とすると、この手紙が天正十六年たること、この記載によっても動かぬことになる。次に、「般若壺」という名が見える。利休は、この薬茶の口切りをして、飲んだことを氏郷に告げている。この壺は、必ずしも天下一という逸品ではない。が、宇治へ詰め茶に下してしまったので、あなたの上洛の時に、お目に掛けることができないのが残念である。が、茶を少し残しておいたので、これを一服差し上げたい、と申し送っている。「関白様、大坂に御成りにて候」という。秀吉は、九月七日に大坂に下向している（『言経卿記』）。これまた、記録とも合致している。いよいよ、この手紙が天正十六年たることは、推定を誤らないことになる。返し書きに、利休の狂歌が一首。「大仏は極楽へこそ行くべき　同じ浮世の月を見るかな。また、私の壺もやっと、宇治から届いております。大仏屋敷の口切りの茶事にこそと、あなたの御上洛を待って口を開けましょう。この手紙は、利休の六十七歳のもの。あて名の蒲生氏郷は三十三歳。

菊月二十二日
伊勢侍（持）従殿　人々御中
宗（花押）
宗易
利休

一、我等、大仏普請、一昨日、家の屋根を葺き申し候。当月中に茶湯出し申すべき覚悟に候。貴殿へ御屋敷、渡し申すべく候間、其の分御心得なされ、早々と御上洛なくては、家の塵成り申す（間）じく候。殊（事）の外、大仏は寒く申し候。御城、早や出来と存じ承り候。目出度く存ぜしめ候。将亦、般若の壺、口を切り茶飲み申し候。凡そ天下一とは申し難く候壺、別して、今、下し申し候事、惜しく存ぜしめ候。茶を少し残し置き申し候。是を一服、申し上ぐべく候。関白様、大坂に御成りにて候。当月中は、未だ逗留申さず候。恐惶謹言。

大仏は極楽へこそ行くべきに　同じ浮世の月を見るかな

我等が壺も上洛申し候えども、大仏にて口を切るべく存じ候いて、口をあけ申さず候。かしく。

菊月二十二日　宗（花押）

伊勢侍（持）従殿　人々御中　宗易　利休

皆さんにお渡しした資料ですが、ぼくが高山右近のことを調べている中で見つけた小松茂美さんの論文の一部です。**「伊勢侍従宛利休手紙」**の解釈が記されています。でも、肝心なことは全て消されているのですね。特に肝心なことは、利休七哲の中で 5 人までがキリシタンだと言われているのですが、その人たちの関係というものがどこにも記されていないのです。この「伊勢侍従宛利休手紙」は、利休さんが伊勢侍従である蒲生氏郷に宛てた手紙でして、この蒲生氏郷も、高山右近も利休七哲の一番、二番とされる凄い人なのです。これは千利休の孫である千宗旦（三代）が言っていたことを表千家四代・江岑宗左が記録した『江岑夏書（こうしんげがき）』に、利休七哲の一番が蒲生氏郷、二番が高山右近と書いているのです。こういう証拠、関りについての記録があまり無いのです。全部ブツブツに切られていて繋がっていないのです。これは、江戸時代になってキリスト教と侘茶が意図的に分断されたからなのですね。その当時の為政者、学者、茶人たちによってです。ですから証拠が無いのです、というのがぼくの状況証拠から判断できる結論なのです。

◆戦国武将が侘び茶に求めた和らぎ

もう一つの資料は、「戦国武将が侘び茶に求めた和らぎ」と書いてありますが、この最後に「Ⅲ．侘び茶で表現する和敬清寂」というのがあります。　この**「和敬清寂」**という言葉は皆さんも良くご存じでしょうし、茶の湯では「一期

一会」とともに大切な言葉として知られています。角川茶道大事典にも、この「和敬清寂」は仏教からきているのだと説明しているのですね。それは、江戸時代になって千利休の侘び茶は「仏教哲学」からきているものだというのが大前提になっていたからなのです。ぼくが即中斎宗匠の時代に表千家の横山悌子先生に入門しましたが、即中斎宗匠の側近であった横山先生も仏教哲学が中心でした。それほど、仏教哲学に染められた茶の湯に、牧師のぼくがのめり込んで、これほど茶の湯に親しみ、こうして皆さんとお会いするというのは、自分自身でも不思議なのですよ。

でも、体験的に実証的に考えて、ぼくは必ずしも侘び茶を仏教哲学で説明しなくてもいいのじゃないかと思ったのです。**「和敬清寂」**という茶の湯の根本的な世界は、聖書のイエス様の**「山上の説教」**で全部説明できるというのが、資料の「和敬清寂」の説明なのです。この「和敬清寂」を英訳すると、それは何と牧師の説教になるのです、というようなことを皆さんに解ってほしいなぁ思って資料の最後に載せたのです。こういうことを言っても、面白いことに表千家のリーダーたちは、ぼくの説に反対しないのです。それは「好み」だからですね。

Ⅲ. 侘び茶が表現する和敬清寂

一期一会と並んで知られている茶道を表す言葉に「和敬清寂」がある。室町時代に茶道の師である村田珠光が創唱したと言われている。それが、武野紹鷗、利休に受け継がれ、江戸の初期に、人々によく知られる言葉になったと伝えられている。『角川茶道大辞典』には、和敬清寂について次のように記されている。

「茶道の実現しようとする 4 つの根本精神を 4 字に要約したもの。この 4 つが茶道の目標として、いつごろから唱えられたかは明らかではないが、おそらく茶道としての自覚の高まった江戸前期からであろうと推定される。和とは単に仲良くするというだけでなく、主(あるじ)も客も個性を発揮しそれぞれ独立独歩の存在でありながら、しかも万人共通の精神的な基盤すなわち仏性に掃一して、相互に二にして二ならずという不二一如の『一座建立』することである。敬とは主従・上下の秩序を重視したかつての封建道徳ではなく、主も客も仏性を具有する尊厳な人格であることを相互に認め合い、他の仏性に対して合掌し合うことである。清とは感覚的に無垢清浄であるだけでなく、より以上に、心を清め、この『円虚清浄の一心』から自由に働くことである。寂とは普通には静寂の意味であるが、茶道の目標としての寂はそれに尽きるものではない。一つには環境によって動揺させられることのない心の寂、寂然不動の心境のことであり、更には円寂すなわち涅槃、大調和の世界のことである。『露地ノ一境、浄土世界ヲ打開ク』(南方録)というその浄土世界のことである。／芳賀幸四郎」

ここではすべて仏教精神で説明されているが、私は高山右近がそうであったように、キリストの光に照らして、和敬清寂の解説を試みたい。利休の侘び茶には、確かに和敬清寂の精神が込められているが、それは聖書の中心思想でもあると私は考えているからである。裏千家国際局監修『茶の湯英会話』(淡交社)には「Harmony」、「Respect」「Purity and Tranquility」と英訳されている。英訳されると、キリスト教的背景があぶり出されてきて興味深い。

- 和＝Harmony
  調和である。人と人の調和が失われるとき、交流の断絶が生じる。調和された生き方を求めて、人の心は喝いている。戦国の世は緊張が高まり人と人の調和が保てなかった。その中で、茶事を通しての和が求められていた。今日の科学、経済至上主義は、急速に地球を崩壊させる危機に追いやっている。これも人の心が喝く大きな要因である。創造主と人間との断絶はあらゆる面での調和を壊している。人の心は心を求めて渇いている。つまり、神と人との調和を求めているのである。今日でも茶の湯は、人と人との調和を求めてなされている。
- 敬＝Respect
  尊敬、敬意、畏敬である。茶の湯は、敬神人愛の修道である。キリストは、聖書の中心は神を愛し、人を愛することであると明確に教えている。この二つが満たされない限り、調和のとれた人格的な生き方は出来ないし、人の心の虚しさは埋められる事はないのである。
  「イエスは彼に言われた『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第 1 の諌めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第 2 の戒めもそれと同じようにたいせつです。」(マタイの福音書 22 章 37･39 節)
- 清＝Purity
  清浄。これは、庭、茶室、道具などの清浄だけではなく、身体の皮膚の内側に、清浄が宿っていなければならないことを表している。聖書においてもこの清さが求められている。
  「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身もあらゆる行いにいて聖なるものとされなさい。」(第一ペテロ 1 章 15 節)
  繰り返し述べるように織田有楽斎は、高山右近の高潔な茶の湯を批評して「清めの病」を患っていると言い、ロドリーゲスは、「高山右近は、神に祈るために茶室にのがれた。」と記している。そう言わしめるほどに右近の茶は、神に倣う者としての修道の茶の湯であった。
- 寂＝Tranquility
  静寂。茶の湯で大切なのは静けさである。静けさとは、人が神の存在を意識するときに生じるものである。そして、生きることにおける寂‥‥すなわち静穏は、神の前に自分が如何なる者であるかを知って、心の罪、汚れを悔い改めること。これこそが寂の姿といえよう。寂を知る人は、命の躍動を知る人でもある。静寂にこそエネルギーの胎動が秘められている。
  「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて信頼すれば、あなた方は力を得る。』」(イザヤ書 30 章 15 節)

つまるところ、和敬清寂とは、神を愛し、人を愛する調和のとれた精神である。その和敬清寂が最も具体的に表現されている場は茶事である。人の心に丁寧にもてなす心、それこそが和敬清寂ではないだろうか。戦国時代とそれに続く江戸時代の封建体制の中で、人々が茶事に異常なまでの関心を持つようになったのは、和敬清寂を求める人間の裸の心の渇きを表していると私には思えてならない。日常生活で茶室に静けさを求める時、そこに神の声を聴く。そこにいる隣人の心に同調することで、日々新しい和敬清寂を体験するのである。

◆千利休の遺偈と高山右近の書状

資料の最初にあるのは、「千利休の遺偈（ゆいげ）」です。利休さんは 70 歳の時に秀吉から切腹を命じられて自刃するのですが、その前に 4 通ぐらい同じような内容の書状を遺しています。その中でも、これは完成度の高いものです。たぶん表千家にある書状だったと思います。これが利休さんの書状で、次の資料が私が研究している高山右近の「日本訣別の書状」です。ぜひ、皆さんにこの二つの書状を見ていただきたいと思い、きょうは資料としました。この時の講演のタイトルでは「戦国武将が侘び茶に求めた和らぎ」としましたが、今のぼくは「侘び茶の温もり」が好きです。千利休の侘び茶は「温もり」なんですよ。

◆キリスト教の禁教、そして解禁

熊倉功夫先生の師に西山松之助先生という方がいらっしゃいます。西山先生が凄いのは、千利休の茶杓を模倣されて先生が削られた白竹の実竹の茶杓を「この茶杓はクルス（十字架）だ」って言っちゃったものですから、表千家からは完全に排除されました。

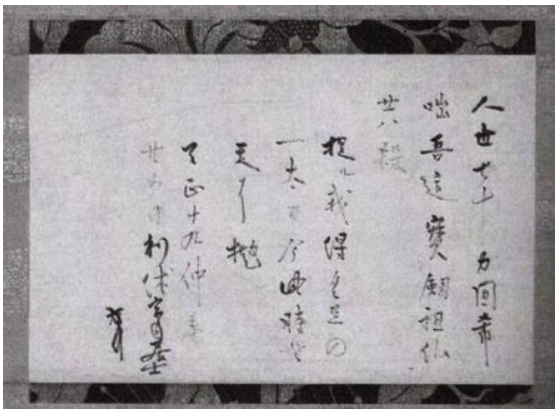
さて、千利休が力を持ち始めて秀吉が天下を取る段階で、キリスト教は秀吉によって邪教とされていたのです。特に九州征伐と言われた島津攻めで、秀吉の全軍が筑前箱崎、現在の福岡県福岡市に集まっている時に、彼がこれから築こうとしている封建社会に、宣教師や高山右近などは害になるということで「キリスト教禁制（通称、バテレン追放令）」が出されたのです。

この時は高山右近を狙った部分があり、彼や家族は小豆島の奥の方まで逃げているのですね。これによって、キリスト教もキリシタンも邪教、日本にあってはならないものとされたのです。これをさらに論理武装したのが徳川家康であり、三代・家光ですね。完全に仏教のお坊さんたちをバックグラウンドとしてキリスト教を排除しました。そして、明治時代まで徹底的にキリスト教を抹殺しようとしていたのです。

幕府や明治政府は、抹殺したと思っていたのですが、実はキリシタンは逃げまくって北海道まで行ったのです。明治時代になって函館で殉教者が出ているのです。どういう人たちが明治時代になって殉教したかということが函館市教育委員会の論文の中に記されています。江戸時代末期に外国の人たちがやってきて、明治政府が始まって「キリスト教禁教」政策が外交問題となり諸外国からの抗議があって、明治 6 年になって初めて「禁教の高札」が撤去されたのです。さらに凄いのは、仏教を中心としていた日本の宗教だったのですが、明治 4 年に「廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）」が出されて、仏像や仏具が破棄されるという動きがあったのです。明治になって諸外国から宣教師たちがやってきて、婦女子にキリスト教の教えを広め、大学なども作り教育に力をいれました。そこで初めて、「キリスト教っていいじゃない」と見直されるようになったのです。

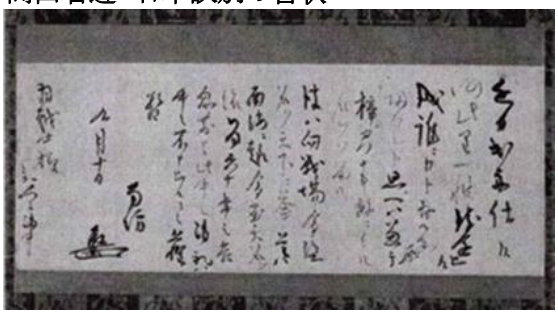
◆戦国武将が侘び茶に求めた和らぎ
　－千利休とキリスト教の接点－　〔髙橋先生資料より〕

Ⅰ．千利休の遺偈



人生 70 年　えい、えい、えい
　（忽然と大悟したときに発する声）
この宝剣で祖仏も我も共に断ち切ろうぞ
　（まさに殺活自在の心境なり）
みずからの得具足（えぐそく、上手に使える道具）の一本の太刀を引っさげて
今まさに、我が身を天に抛つ
　（なげうつ、いまや迷いも何もない心境だ）
【『利休の死』小松茂美著／中央公論社】

Ⅱ．髙山右近　日本訣別の書状



1614 年（慶長 19 年）11 月 8 日、長崎・福田港から高山右近、内藤如安とその家族たちはスペイン宣教師、モレホン神父らと共にマニラに向かって出帆した。その1ヶ月前に細川忠興に宛てて次のような書簡を右近はしたためている。

〔中略〕。 小松茂美氏による意訳は次の通りである。

近々、出航いたすことになりました。ところで、このたび一軸の掛物をさし上げます。まことに、どなたにさし上げようかと思案しましたが、やはりあなた様にこそふさわしいもの、私のほんの志ばかりでございます。「帰らじと思えば兼ねて（兼ねて思えば）梓弓無き数に入る名をぞ留むる」 彼（楠木正行）は戦場（四条畷）に向かい、戦死して天下に名を挙げました。是（私＝高山右近）は、いま南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。いかがなものでしょうか。60 年来の苦もなんのその、いまこそ、ここにお別れがやって参りました。先般来の御心尽くしの御礼は、筆舌につくすことはできません。恐れながら申し上げます。

九月十日　　南坊等伯より

羽柴越中守様へ御取次ぎのほどを。

（日本暦 9 月 10 日は西暦 10 月 13 日である。その日から 26 日後の日本暦 10 月 7 日、西暦 11 月 8 日に長崎福田港を出港した。）

◆伊勢侍従宛利休手紙

冒頭の資料「伊勢侍従宛利休手紙 写」の表装されたものがここにあります。ここには、千利休と高山右近と蒲生氏郷の密接な関係が書かれているのです。こういう資料って無いのです。ですから、きょうは凄い手紙を皆さん見ているのです。そして、江原さんは凄い手紙をこんなにも上手に表装してくださったのです。

きょうのテーマの「茶の湯とキリシタン」の接点と言うとここなのです。何かと言いますと、冒頭でも申し上げましたように、千利休と蒲生氏郷の関係は調べることができます。また、千利休と高山右近との関係も調べることができます。しかし、高山右近と蒲生氏郷の関係の資料はほとんど無いのです。誰かが意図的に消したからです。

実は、利休さんがこの手紙を書いたときは御年 67 歳でした。彼は 70 歳で秀吉によって堺に蟄居を命じられ、その後、京の利休屋敷に呼び戻されて、そこで切腹しています。ですから、この手紙を書いた 3 年後に彼は亡くなっているのです。そしてこの時、高山右近は 37 歳で京都から金沢に赴き、蒲生氏郷は 33 歳でした。蒲生氏郷はその 2 年前に洗礼を受けているのです。そういう状況がこの手紙から読め、天正 16(1588)年 9 月 22 日に書かれていています。

高山右近が金沢に赴いたのは、前田利家によって客将として請われて赴いたのですね。領地は持っていなかったのですが、彼はそこで土地の人々に布教したりして生活をしていました。でも、金沢における高山右近の屋敷跡とか消息を辿れる証拠は全て消されていて分からないのです。資料としては全く無いのですよ。でも、この手紙によって、千利休、高山右近、蒲生氏郷の関係、さらに金沢に無事出発したことを喜んでいる内容などが、前半に書かれています。これは凄い資料なのですよ。さらに、表千家には利休七哲の一番は蒲生氏郷、二番は高山右近と書いた四代宗匠の『江岑夏書』という資料があるのですよ。これも凄い資料ですよ。でも、この資料は千利休が直接書いたものではありませんが、四代目の江岑宗左宗匠という人が三代目に言われて書き写したものなのです。四代目までは蒲生氏郷、高山右近のことを書いていたのです。蒲生氏郷もキリシタンでレオという洗礼名を持っていたのです。これらについて説明は無いのですが、断片的な資料としてはあるのです。これらをどう読み込んでいくかというのが、これからの皆様方の研究の世界になっていくわけですね。

的便之条　一筆申候。仍
南坊昨日午刻ニ宮古を
立被申候。浅弾少書状を
被下申候。先々仕合目出
度下向にて本望此事
存候。御心底可為同前と
奉存候。芝　本望由被申候。

【意訳】 的便(てきびん・都合よく)適当な便りのついでがあったので、一筆したためます。仍て(よって・そんなわけで)、南坊(高山右近)が昨日(9 月 21 日)正午に、都を出発されました。浅野弾少(長政)が、書状で教えてくれました。まずまず、幸いなことで、めでたく加賀に向かわれて、本当によかったと思います。ご本人も、心底　同じ思いであろうと思います。芝山監物も、本当によかったと、申されています。

◆茶の湯とキリシタンの関係

そういう訳で、キリスト教と千利休の侘び茶の接点というのが、証拠は消されているけれども、きょう申し上げたようなことを類推すると、深い接点があることが分かります。ただし、茶の湯の世界では、その人々のキリシタン関係のことは一言もないのです。意図的に茶の湯の世界からキリシタンは消されています。ただ、高山右近だけは消すことができなかったのですね。「日本訣別の書状」には「南坊(みなみのぼう)」と書いてありますけれども、南坊というのは「自分は宣教師(南蛮坊主)のようになりたい」という高山右近の願望から出た洒落なんだと思います。今の三千家の中ではキリシタンのキの字も無いのですが、きょう申し上げたように横の関係をこれからも調べていくと、まだまだ文章が出てくるはずです。高山右近の「日本訣別の書状」が、ある日突然、細川家の永青文庫から出てきたようにね。これからもまだまだ資料が出てくると思います。という訳で、「茶の湯とキリシタンの関係とは」のお話は終わります。

◆凄い茶碗

きょうは凄い茶碗を持ってきました。こんなふうに出っ張っていて割れている茶碗です。この茶碗は、今井理桂(いまいりけい)という焼き締めで著名な陶芸家のお茶碗です。この茶碗ってぼくなのですよ。出しゃばりで欠けだらけで、茶碗としての良さはありませんが、たまたま割れ口に金継ぎをしました。それは、欠けだらけのぼくが死んでも、神様の栄光によって輝くことができる、だから、ぼくは欠け口に金を塗ったんだということが今になって分かったのです。おしまい。

今回の髙橋先生の講話にも「**温もり**」が溢れていました。